

繊維・糸・布①

普段身につける衣服、靴、バッグ、テント、寝具…私たちの身の回りにある多くの物は、
天然繊維(羊毛・綿・絹・麻など)や化学繊維(ナイロン・ポリエチレンなど)を原料とする繊維製品です。

私たちは、実に多くの繊維製品に囲まれて暮らしています。

人類は繊維とどう関わり、生活を豊かにしてきたのでしょうか？

● 人類による繊維の利用 始まりは“体毛がなくなった”から！？

人類が動植物の繊維を利用し始めたのはいつ頃でしょうか。それは、人類が体毛を失い、衣服を身に着ける必要が生じた頃(7万5千年前など)にさかのぼると言われています。当初は毛皮をまとっていましたが、環境変化で大型動物が減ると、動植物から繊維を取り出し、糸を作り、衣服をつくりました。最も古い針が1万年前の遺跡から見つかっており、少なくともその頃には繊維から糸が作られていたことが分かります。

● 紡績(繊維から糸をつくること)は人類の大発明

動植物由来の繊維を“天然繊維”といいます。

古くから利用してきた天然繊維は、【麻】【綿】【羊毛】【絹】です。

天然繊維は、絹を除くと1本1本が短い繊維であるため、つなぎ

あわせて1本の長い糸に加工する必要があります。

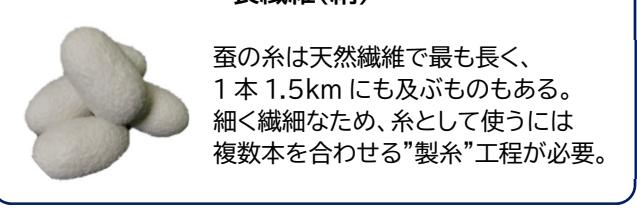
この工程を”紡績(ぼうせき)”と言います。

短い繊維を糸にする紡績技術は、糸と糸の組み合わせで多くの布が作られるようになったことを考えると、人類の歴史の中でも大きな発明だったといえます。

短繊維(麻・綿・羊毛)



長繊維(絹)



【繊維から糸をつくるための道具】



さいしょは“手”。指先でネジネジして糸にしたと考えられているよ



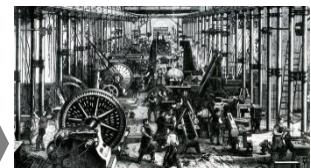
”紡錘車”

世界各地で使用。コマのように回して糸を紡ぐ。手より早く簡単！
(本館2室)



“糸車”

糸車よりももっと早く簡単。
(本館2室)



15世紀ヨーロッパでは糸車が大型化。18世紀には大量生産が可能に。

ちょっとコラム

● 布の機能性やさわり心地はどのようにつくられるの？

繊維から最終的に作られる”布”の機能性や触り心地は、様々な要素が組み合わさって成立します。

おおよそ次の3点が、布の機能性と触り心地に影響を与えます。

- ①原料となる繊維の種類
- ②紡績・製糸方法と糸の太さ(番手)
- ③製布方法(織り・編み・不織…)

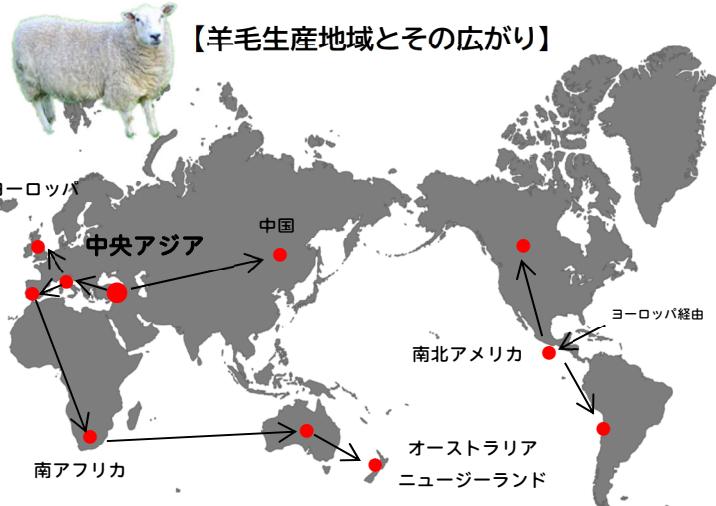
繊維・糸・布②

人類が最も長く利用してきた繊維は天然繊維。
今回はその中でも「羊毛」についてくわしく見ていきます。

● 羊毛の利用

羊と人の関係は紀元前 6000 年頃中央アジアで始まり、紀元前 2200 年頃のメソポタミアでは羊毛で毛織物が作られていたと言われています(諸説あり)。

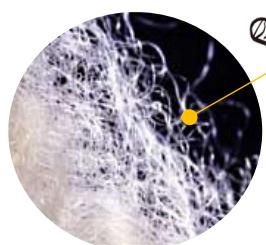
その後、羊毛の利用は地中海を経由してヨーロッパ各地に広まり、10世紀頃の羊毛の産地はスペイン・イギリスでした。現在、羊は世界中で飼育されていますが、羊毛の主な生産国はイギリスの植民地であったオーストラリアとニュージーランドとなっています。



● 【繊維の構造と羊毛製品の特徴】

保温のヒミツはクルクル繊維

羊の毛といえばクルクルしたカーリーヘア。「クリンプ」と呼ばれるこの縮れがあることで繊維同士が絡み合い、その間に空気を含むため保温性が高まります。羊毛製品独特のチクチクした肌触りや伸縮性の高さも、このクリンプによるものです。



羊毛の繊維は1本1本
ねじれている
(クリンプ)

夏にすぐれた調湿性(吸湿/放湿)

羊毛は吸湿・放湿性に優れ、夏やアウトドアにも最適。繊維内側の「コルテックス」が湿気を吸うと、外側の「スケール」が開き湿気を放出。コルテックス内の水分が減るとスケールは閉じるため、衣服内は常に快適な湿度に保たれます。



登山用インナー
登山中は外気・体温の上がり下がりが大きいため、保温性も調湿性も併せ持つ羊毛製インナーが多く作られています。

羊毛がつかわれているもの(例)

- ①敷物(シリア)*本館2室「牧畜」
- ②帽子(ペルー)*本館4室
- ③テントの内幕(モンゴル)



毛の手入れに使うもの

- *本館2室「牧畜」コーナーに展示中
- ①毛すきブラシ(モロッコ)
- ②じゅうたん織用ブラシ(モロッコ)
- ③毛刈りはさみ(イラン)
- ④毛刈りはさみ(イラン)



予告 楽しく学ぶ! 文化人類学教室第6回「繊維と布から見る世界」では、繊維の特徴だけでなく織り方などにも注目しながら、世界各国で作られる布製品を見ていく予定です! お楽しみに。